

讃岐砂糖史

(一)

岡田唯吉

緒言

産業は社會生存の要素であります。故に古今東西を問はず何れの邦國、何れの地方にも、競つて各々其他の産業を奨励、保護し、財源の富饒を謀つて居るのであります。我國に於ても財政の整理と國運の開展をはかるが爲に、常に學者や實務家の間に、積極消極兩方面から該政策を盛んに研究され、又着々實行されつゝあるのであります。本縣亦産業の振興に勤め、財力の充實を謀つて居られるのであります。

回顧すれば享保の昔、吉宗將軍が元祿以來財政の窮乏を救はんが爲に、自ら節儉を行つて天下を率ゐる又特に大に殖産興業に力を盡し、ひいて全國の各藩に於ても亦大に産業を奨励して、府庫の充實を謀るやうになつた。當時我高松藩も殖産に力を盡し、英主松平頼恭(五代)は藩内の地勢を察し、製糖の法を興さんとせられたのである。こゝに於て向山周慶が製糖法の研究となり、後寛速水、木村亘、宮内辰五郎の糖業保護政策の斷行となり、遂によく藩内の富を強固ならしめるに至つたのであります。

此間當路者は實に慘憺たる苦心を以て最も精緻なる經營を施して來たもので、今日の爲政者と雖も或は三舍を避けなければならぬやうのことがありけしなないかとも思はれる。

京大三浦文學博士(周行氏)は嘗て徳川時代史を講ずる時、當時の自治政策や各藩の産業政策中最もよい模範とすべきものは多々ある、然るに今日の爲政者にして地方改善の策を説くもの、勸業の政策を講ずるもの、一度口を開けば直に歐米の政策を説くと云ふことは、實に笑止千万でないか、切角我國の歴史上に立派なよい模範があるのに、何を苦んで自ら求て遠國の策をまねやうとするのであるかと感慨禁する能はざるものゝ如くでありました。誠に味ふべき説ではありませんか。

現今本縣に於て官民共に産業施設上大に努力して居るやうであるが、其効果を見るとまだ隣縣に比し遜色なしとは云へないと思はれます。此時にあたり、既往の産業史を顧ると云ふことは決して無駄ではあるまいと思はれます。此意味に於て我が讃岐砂糖史は此反省材料として、又産業獎勵政策の参考として、最も縁故の近いものと思ふのであります。然し此砂糖史は大正三年の舊稿であります、少し補正を致し大膽にも實業専門學校で發行する本誌の貴重なる紙面を汚すことになりましたやうな次第でありますから、幸に諸賢の御批正を仰ぎたいと思ひます。

併しこゝに一寸念の爲御ことわりをして置きたいことがあります。私は讃岐製糖の今姿徴して振はないのを、再び昔にかへしたいとは思ふものではありません。それは嘗て台灣旅行の際、彼甘蔗作や

製糖工場並に高雄港の砂糖積出しの盛況等を詳細に視察し、且つ當時總督府糖務課長眞室幸教氏(本縣人)で讃岐糖業の状況を研究し居り、又ジャバ島に至り親くジャバ糖につき研究を積て居る専門技師より製糖上の所見を聴き、我讃糖は到底今後日本糖業界に乗り出し得るものでなく、僅に農家の副業として一家庭工業に満足しなればならないと云ふことをとつくに承知し居り、且つ其後台灣糖以外に南洋糖は勿論遠く米の玖瑪糖等がごん／＼輸入され、之等は皆甘味が強くて、價額が大に安いといふ状況になつて來たのですから、最早地砂糖等には見向くのも馬鹿々々しくなつて來ました、之必竟明治以後に於ける産業政策の變化と交通運輸の便開け、生産物の供給が世界的になつて來たのでありますから、所謂時代趨勢の然らしむる所と諦めなければなりません。故に其變遷を推究し、其一時盛況を見るやうになつた道行き即ち如何にも眞面目に奮闘努力して來た跡を研究すると同時に、尙ほ一面には現今の生産物中にも亦將來に於て、此憂目を見るやうになる物があると云ふことを、今から警戒して置かなければならぬと思ふのであります。

第一節 砂糖の起原傳來

砂糖の原料である甘蔗が、印度に有つたことは大變に古いことであります。釋迦如來の祖先に「イクシユヴークス、ウイルダーカ王」といふ人があり(其年代は不明)佛典に之を漢譯して甘蔗増長王と云つて居るのでも知ることが出來ます。

印度産の甘蔗が西は古く希臘人に傳はつたものであります。希臘人で始て之を談つたのは西紀前四世紀の人テオフラストスと云ふ者で、「蘆荻の類で蜜の如きものが出来る」と曰ふて居ます。之は慥に甘蔗其物を言つたのであります。又それ以後の希臘人中には「蜜蜂の力によらずして一種の蜜の如きものができる、蘆荻の類が印度から産する」と曰ふものがあり、或は「印度にできる蜜は蘆の葉から生み出す、但し露の如く葉から滴る、又此木から滲り出して蜜を取る」と云ひ、或は砂糖は印度では「甘蔗から産する蜜の部分を集めたものである」と云つて居る。之等は印度から希臘人に傳聞して居る話が、古記録に見えて居るものを拾ひ集めたものであるけれど、希臘人で眞に印度の甘蔗其物を目撃したのは、西紀前四世紀末で亞歷山大王が印度侵入の時であります。其時従軍した希臘人で印度産甘蔗の事を目撃して話した人があります。

羅馬人で砂糖の事を語つた人は、希臘人よりは後で西紀前一世紀の人である。其話によると「砂糖は甘蔗より取つたもので、其色は白く齒間に入ると碎け易い、其大さは棗のやうで藥用のみに用ひる」と云つて居る。此話は氷砂糖を言つたのである。

古くより砂糖は印度に産し、海陸路によりて希臘、羅馬、支那に輸入した故に、希臘人、羅馬人は古くより之を印度産として話して居る、加之英語で砂糖をSugarと云ふのは、其原ラテン語Saccharum (サツカルム) より來たので、此ラテン語は又梵語Śaṛṣa (サルカラー即ち砂糖の意味) から來たもの

であるから、歐洲諸國の砂糖を呼ぶ語は、其原印度語「サルカラー」に基くものである。翻て東洋方面では砂糖のことが石蜜といふ名で始て漢史に現はれてゐる。斯の名の始て見えてゐるのは前漢時代で漢の高祖の時(西紀前三世紀末 我々孝元帝の時)今の福建省方面から石蜜二斛を獻じて來たとあるのが、支那で砂糖の見えた始めだと思はれる。石蜜といふ名から察すると、之は砂糖の塊か、多分は氷砂糖の類を云つたものでありませう。何れにしても砂糖に關係あることは慥かである。其後三國時代になり、吳の國に甘蔗の栽培があつた。其栽培せられた地方は吳の領内の南端たる交趾地方(今の佛領 東京地方)である、吳錄地理志に「交趾に甘蔗あり、大さ數寸其味醇美なり。筭つて以て錫セ(飴の意)となす、之を曝せば凝つて氷の如し」と記してゐるのは、當時甘蔗を栽培し、又製糖の事も知つてゐたことが分る。而して當時こんなにして得た砂糖は、已に石蜜とは言はず甘蔗錫と云つてゐた。其後唐の太宗時代(我々舒明、皇極、孝徳の頃)になり唐と印度との交通が盛になり、太宗は使を天竺に遣り熬糖法を取らせた。由て揚州地方(今の福建 廣東 浙江等)に甘蔗を栽え、之を作瀝して砂糖を製造させたが、當時印度方面から唐に輸入した物よりも其味一層優れて居たと云ひます。(唐書廢揚州 國傳にある)而して砂糖の名も亦唐時代から見えてゐる。糖字の意は飴で、甘蔗錫とある錫と同意味で、約まり砂に似て飴のやうな甘いものと云ふ意である。(山下寅次君説)

第二節 我國への砂糖傳來

孝謙天皇天平勝寶年間(〇^{四一}年代)、唐僧鑑真來朝の時、初て砂糖を携へて來たといふ。即ち東大寺獻物帳記錄に蔗糖二斤十二匁三分を貢獻したやうに記されてゐる。之が我國に砂糖を見る初めらしい。けれども調味には用ひられず、平安朝になつても甘味は専ら千歲藥アマヅラを煎じ、其汁で付けた。室町時代になり甘味に供せられたのは百合砂糖飴で千歲藥煎は最も多う用ひられた。當時尙ほ砂糖の輸入は甚だ稀で高價であるから、大抵藥用に供せられ菓子等に用ふことは甚だ稀で、羊羹にも唯の羊羹と、砂糖羊羹との別があり、饅頭に砂糖饅頭、菜饅頭がありました。永祿元龜の頃、更に輸入があつたけれど、未だ其量は僅少で藥用に供せられ、嗜好品とするまでにはならなかつた。慶長年間(二二五六年間)薩摩大島の人、直川智が琉球に赴く海上で颶風に遇ひ、支那に漂着して偶然製糖術を習ひ、歸途蔗種を大島に移植し、漸次鬼界ヶ島、種子ヶ島等に移植しました。家光將軍の時(二二八三年間)蔗種を琉球に求め、之を各藩に分ち、後寛文二年(二三二二年)の頃白糖冰糖精製の術をも知るやうになつた。然し社會の進歩は益々飲食の調味を上進させ、漸次支那、和蘭より砂糖の輸入を増加し、元祿の頃は毎年の輸入額四百餘萬斤に上りました。從て菓子の製造も長足の進歩をし、天和の頃(綱吉將軍治世の始)京の本町桔梗屋河内が製造した菓子の銘は、大約百七十餘種(さくれ石。夜の櫻。松衣。寢覺。唐衣。或は梅花餅。薄雪餅。椿餅。唐饅頭。氷饅頭。鬼饅頭。等)あり、二十年後寶永の頃(二二六四年間)世上菓子の數三百九十餘種の多きに上つたといふことである。(日本風俗史、大川郡砂糖史、日本商業史)

吉宗將軍の時に元祿以來財政の疲弊を救済せん爲、自ら節儉を行ふて天下に範を示し、又特に大に殖産興業に努めたから、外糖輸入の漸く多くならうとするのを防ぐ爲、享保十年(二三八五年 中御門吉宗) 蔗苗を琉球から引き、親ら小性役に命じて吹上庭園に試作し、傍ら支那の李大衡を聘し家臣に製糖術を學ばせた。又人を四方に遣して物産を巡檢させたりして、民業獎勵の法に盡したものであるから、諸藩亦能く其意を受け、競ふて國産を興すやうになりました。

吹上御苑は吉宗公の時、茶亭の稍華美なのは皆毀たれ、僅に一二の小亭を存して休息の用に供せられ、其他苑内は悉く鋤平けて試験場とせられ、學問所、繪所、天文所、鞠場、藥草製所、酒造所、菓子製所、砂糖製所、穀物取集場、綿羊飼立場の類を設けられ云々と「徳川太平記」に見えてゐるが、然し白糖を製する法は未だ詳しくはなかつた。當時の人は何れも舶來のものとのみ思つてゐたが、明和五年(二四二八年 家治將軍) 大師河原の百姓太郎左衛門と云ふ者が砂糖の製造を始め、近隣の人々は彼に付て製糖を學んだことを武江年表に記してある。之は源内の製法に據つたか否やは分らない。

第三節 讃岐への砂糖傳來

當時高松藩主松平頼恭(五代 穆公) 藩内の地勢山が高くないから樹木が茂らない、河は淺くて水利潤澤を缺ぎ、旱害が頻りにやつてきて封内は年々衰頹し、人民は大に心配して居る狀を察して、木村亘、寛

速水を擢用し大に殖産興業に努めました。延享四年(二四〇七年)平賀源内を召して、藥坊主とし(十九歳のとき)

朝鮮、和蘭等の藥種を栗林園内梅木原藥苑(赤橋の西北側梅林の邊)附近に試植させ、又源内は安原白峰に朝鮮人參

を移植し、花畑(今の花園町附近)に甘蔗の栽培をしました。が、寶曆二年(二四一二年二十四歳の時)飄然去て長崎に遊び、同三

年始めて江戸に出て、後天工開物にならつて物類品隲を著し、寶曆十三年五月に出版しました。

『物類品隲附錄』に人參培養法と甘蔗培養並に製造を説き、源内は自書で甘蔗を搾めて糖汁をとる所を圖に示し、尙ほ次のやうに記してあります。

「右人參培養は予手自植之數年略其意を得たるに似たり甘蔗の如きは是を製すること不多故雖不得其精詳諸書に記する所と予が微く試る所とを以て記之甘蔗可植の地此法を植試ると數年に至れば自其法の詳なることを得べし是不如老圃老農云々」

之は源内が机上の空論を以て、濫りに人を誤つてはならないことを恐れての注意でありませう。故に甘蔗培養法は其方法を説いた迄で、まだ實地に就ては殆んど試みなかつたものと見てよからうと思はれる。

元來賴恭公は藥草採取とか製法と云ふやうなことに非常な趣味を有して居たので、毎年秋冬春探藥と稱して、南は安原の奥、東は阿波境、西は金毘羅山限りに藥園方、草木方、其外御小性共數人、奥横目一人指し副へ、初は平賀源内、後は池田玄丈、深見作兵衛が頭取として、五日或は七日泊りで出

かけ、藥艸は勿論珍艸珍木を數多掘取り、高松へ持歸て夫々植付けた。

又栗林中梅木原に柵を引まはして藥園をつくり、池田玄丈を頭取とし、中間^{ちうけん}を專任として付きさらせ、御小性藥園方輪番で日々其經營にかゝり、尙ほ臨時手傳人等もあつた。就中藥園係中に倉知彌次郎と云ふ者があつて、能く公の旨を含み、本草學を深く研究し、頭取と示し合せて和人參初め諸藥草の内御國益となるべき品々を撰び、追々澤山に殖し種々製法も手に入り、將來屹度御國益となるべき勢になつたが、彌次郎は病氣となり、剩へ公の逝去となり中道で挫折したことは甚だ惜むべきだと「穆公遺事」に詳細である位だから、當時頼恭藩主は薩藩が早く製糖法を興したことを聞き、之を得んと池田玄丈に意を傳へ、此に其門人向山周慶が製糖法を研究するの動機をつくつたものであるといふことを察し得られます。

第四節 向山^{サキヤマ}周慶^{シュウケイ}略系

【一】白鳥村向山カツ氏藏系圖拔萃

向山 政 永

湊村に住す政所相勤む本家佐右衛門死後醫を後見す
始興右衛門と云後佐五右衛門と改む 安永三年三月十三日歿

長男

佐五右衛門政久

湊村に住す 農業勉強天明年中薩州人其助來る 私有地有周慶と同心協力甘蔗を作り
製す砂糖木車七株 寛政二年四月三日歿 法名乘蓮院法車能運居士

二男

興右衛門

同村に住す 始茂太夫と云政所役相勤む砂糖車七株 佐々木又右衛門祖也
寛政十一年末十二月廿七日歿法名德厚院遊峯居士

【二】松平家藏家譜、登仕録及向山氏年忌帳参照

崎山周慶政章

三男
周慶政章

若年より醫業に志し京都にて業を得たり故に高松侯に召出され〇〇甘蔗を申聞歸り兄政久と同心協力右了助と製法致致
文政二卯年九月廿六日卒 法名義正院法山周慶居士
妻三木郡井上村松原佐五郎方より來

金太夫

湊村に住す
天明七丁未年一月五日卒禪林觀空居士

佐五右衛門政隣

同村湊村住 農事勉強伯父周慶と相計り享和三癸亥年國府へ砂糖獻納す 文化七午年二月六日卒法名英照院春峰實雅居士

新吾政常

幼名辰太郎にして三本松醫師兄島周希の忤 天保二年三月向山家相續致歳二十二其後佐五右衛門と改む
天保十三年十一月庄屋役仰付けられ林兵衛と改む 役中帶刀仰付けられ明治三年二月御領分申
一統御役御免仰付けられ勸業に志し甘蜜製作種々勉強致
明治五年澳國博覽會事務局安岡君御派出に際し香川縣へ出頭遊ばされ上申仕候 明治十一年七月廿二日卒法名蓮臺院篤信謙義居士

享和三卯年四月十四日被召出御藥坊主並被仰付三人扶持被下置
同日砂糖製法の義猶以出精可仕候且又御國産の藥種類彌繁榮致候様心掛御林藥園藥草の義出精仕御用に立候傳可仕旨被仰付
同六月二日砂糖一件先達而中渡候通相心得別而氷砂糖仕方立猶此上相働下直に多分出來候様可致候依て御林藥園御用向御免被成
文化九申三月二十五日療用出精仕候に付御藥坊主被仰付四人扶持御増都合七人扶持被成下
文化二卯六月十六日御扶持方八人扶持御増都合十五人扶持被成下 同九月廿七日病死 (松平家藏家譜)
文政二己卯九月廿六日 行年七十四歳
義正院法山周慶居士 門弟の誠意により遺骨本葬見性寺内元向陽庵 分葬湊村

(妻) 智正院壽山淨榮大姉

行年七十三歳 井上村松原氏より來る
文政五壬午年二月十日見性寺に葬り頭髪を湊村に分葬

長女ユ

力 梅華妙童信女 天保十四年九月十四日
但馬來竹方へ嫁し候處同家斷絶に付此元にて回向致候事

女ミ

ス 蓮光童女 寛政二戌年七月五日

讃岐砂糖史

清蓮童子

天明六丙午年四月二十日

鷹之助

信教童子 享和三亥年十月二十三日

波之助

覺如童子 寛政九巳年九月十四日

常之進

如幼童子 寛政九巳年九月二十五日 (向山氏年忌帳)

崎山周達政則

藥坊主亡周慶悻
文政二卯十二月朔日亡周慶義年來相勤其上御國砂糖製法基本にて當時専ら御國益に相成且家業致出精候に付格別を以被召出御藥坊主並被仰付御扶持方七人扶持被下置 同八酉正月廿九日病死 (松平家藏家譜、松平家藏登仕録)
字政守 文政八乙酉正月廿九日 行年四十二 清正院素光周達居士 見性寺に葬る

妻 ヲ ス

向山周澤政實

安養院智光妙雲大姉 文政九戌年三月五日 行年三十九歳
出作村野口祐右衛門方より來る (向山氏年忌帳)

文政八酉十二月廿二日亡周達義勤の間も無之候得共祖父周慶義年來相勤其上御國砂糖製法基本にて當時專ら御國益に相成且家業致出精候に付格別を以被召出御藥坊主並被仰付三人扶持被下置 文政十亥十二月七日官吾と改名 同十一子四月七日向山と苗字文字改 天保四巳正月十八日官輔と改名 同十亥二月十九日是迄本役打込相勤候由に候へ共以來勤方不及旨被仰付 同十一子十二月十日周澤と改名 同十二丑三月二十二日御藥坊主手支に付本役申合當分押廻り相勤可申旨被仰付 弘化二巳十二月朔日療用致出精候に付表醫師被仰付二人扶持御増都合五人扶持被成下 嘉永二酉七月晦日本科相行居申候所鍼術茂相兼相勤申度願の通被仰付 同三戌八月廿九日與醫師被仰付御扶持方二人扶持御増都合七人扶持被成下 同五子七月二日御扶持方三人扶持御増都合十人扶持被成下
安政元寅三月三日病死 (松平家藏家譜、松平家藏登仕録)
行年四十六歳 信受院始覺本成居士 本覺寺に葬る

向山好哉

表醫師亡周澤養子
實は與醫師笹山壽庵弟

第五節

向山周慶

(綿糖共進會報告、向山翁砂糖開基碑、向山氏系圖、家譜、讃岐糖業之沿革、大川郡砂糖史、定國三郎氏談)

向山周慶は延享三丙寅年(二四〇六年)九月十六日、大内郡湊村に生れ、少時醫を藩醫(奥醫師 十人扶持)池田玄丈に學び、傍ら殖産に志し堅忍不拔でありました。

寶曆年間、藩主頼恭は深く封内の衰微を憂へまして、甘蔗栽培を奨励したけれど、製糖の法がよくなかつたので失敗をしました。そこで頼恭は銳意玄丈に命じて製糖法を研究させましたが、中途で玄丈は病死しました。玄丈は臨終に際し周慶を招き「製糖の事は汝生涯心に銘し、必ず我君の本懷を達するやうにせよ。」と吳々遺言されたから、周慶は大に感激し、誓つて素志を達しやうと専心製糖研究に従事し、家事を顧みなかつたことが十數年であつたと云ひます。

周慶、嘗て京に學んだ時、薩摩の醫生某(浪士某)が能く製糖法を知つて居たから、兼ての素志を談して其傳授を頼みましたけれども、國の大禁であるからと云つて承知してくれなかつたが、周慶は他日に於て必ず其法を授かりたいものと思つて、歸國後も屢々書を送つて矢張り交情を厚くして居ました。

後天明八年(二四八年)家齊(藩主松平頼起)正月京都大火の時、醫生某は此災に遭ひました。周慶は之を聞き特に厚くそれを救助しました所が、某は書をよこし其厚誼を深く謝して來り、且つこの高恩に報る爲製糖法を傳へやうと曰つて來ました。周慶は大に喜び、直に上京其教を受け、遂に多年の志を達し、始て白糖四五十斤を製しました。(時に周慶四十三歳)

又此頃(天明中)薩摩の人、良助四國巡拜をして當讃岐に入り、病にかゝり湊川堤防(今の白鳥村で縣道筋より南)で非常に苦んで居ました。向山政久(周慶の兄)は之を見て之を救ひました。此時周慶は醫を學で居たから其病人の爲に診療を施して遂に癒えました。所で彼良助が薩州人であると聞いて、周慶は親しく製糖法を聴き、又自己の抱負を含めて旅費を與へ郷里薩摩に歸り、蔗苗を求めて來させました。

數年の後良助は甘蔗數莖を携へて、再び向山の家に歸り、周慶及兄政久、與右衛門、其子政隣等を助けて邸外二ヶ所に試作栽培し、且つ益々製糖の研究に努めまして、遂に冰糖、紫糖、霜糖を製出しました。次で政久は寛政二年、與右衛門は同十一年に死にましたから、周慶は専ら甥政隣と協力して益々深く研究を積み相共に享和三年(二四六三年 頼義藩主)砂糖を藩に献し、且つ製糖獎勵の必要を説きました。

此年四月十四日藩は周慶を召して藥坊主としました。(後竟に十五人 扶持となる)時に五十八歳であります。それから藩は財政の困難を救済する唯一策として、令を下し大に甘蔗栽培を勧め、且つ其收穫期に際し周慶を封内に派遣して、周く製糖の秘術を授けさせ、こゝに頼恭藩主の遺志は周慶が殆んど數十年間の苦心により、舶來糖を凌駕するの優等品ができるやうになり、終に讃岐砂糖の基を開くやうになつた其功蹟は實に偉大なるものであります。遂に阿波土佐其他十數ヶ國亦皆我讃岐の法に習ひ、製糖を以て生活の機軸としたものが非常に多くなりました。

周慶は文政二年(二四七九年家齊藩主頼儀の終り)九月廿六日高松の邸(本町四丁南側)で亡くなりましたが、門弟の誠意により

遺骨の本葬を見性寺内元向陽庵に行ひ、遺髪を湊村(今白鳥村 同家墓所)に分葬しました。享年七十四歳、法名義正院法山周慶居士。夫人は三木郡井上村(今木田郡平井町大字井上)松原佐五郎方より來て、二男五女を生みました。周慶死後三年、即文政五年二月十日歿しました。法名義正院壽山大姉。末男周達は父の功により、文政二年十二月藥坊主七人扶持仰付けられ、七年後歿し、其子周澤亦祖父の功により藥坊主に召出され、後十人扶持に加増されました。

良助は周慶の歿年即文政二年十一月廿一日死にました。俚人之を湊村周慶墓側に葬りました。良助は子がなく引田村鹽屋から夫婦養子をしたが、子孫代々貧で後鹽屋に轉住しました。

【餘 談】

製糖創業の際は農民皆之を一子相傳とし極て神聖なものとし、又秘密を守つたものであります。左に其一例をあげませう、如何に當時製糖業の尊かつたことゝ、人情の素朴であつたことが分ります。

【引田製糖創始の時傳授の誓文】

神 文 の 事

一、白砂糖種々製法之秘事御傳授被下候上者從一子相傳外他國者勿論雖一家兄弟猥りに他傳授仕間敷事

一、製法之諸道具決而他見仕間敷事

右於相背者

奉誓 天照皇太神宮。八幡大神宮。春日大明神。金比羅大權現。熊野權現。牛主辨財天。其外日
本大小の神祇。可蒙御罰者也仍而
神文如件

寛政十一己未九月廿七日

(周慶が召出サル、五年前)

田 中 八 郎 右 衛 門

外 三 十 七 名 印

卷末に熊野權現の神符(鳥の墨繪)を添へてある。若し誓約に違ふ疑ひある者があれば、此神符を水
に浮べて吞ませると忽ち其徴証があると曰ひます。

弘化三年(二五〇六年 頼胤藩主)周慶の孫、林兵衛及郷人が祠を建て向良明神コウラといひ、砂糖神としました。之は
向山の向と良助の良とを取合せて名けたものであります。

今年夏又建碑を企て、藩儒高尾養(名氏養字子皓號竹溪市 内内町村井樓の東に住)に碑文を撰んで貰ひ、嘉永三年(二五〇年 頼胤藩主)九月
に竣功しました。

【向山翁砂糖開基碑】

夫砂糖以甘蔗作之人家食物之用不少矣然上古無之盖享保年間自琉球始傳其法於薩州也吾讚國

府索其法既久矣嘗命醫池田玄丈者搜作之然不能得矣時有向山翁者即玄丈弟子也翁年猶少壯遊學于京師時有薩州醫某生者能製砂糖翁乃就學其法故能達其術。國府聞翁能達其術乃召出令製砂糖翁已蒙其命亦有薩州人良助者來讚時得病大困翁爲診治遂癒良助本能達造砂糖術於是爲翁佐之二人同心勉勵製出水糖紫糖霜糖盡能成之皆得絕品享和三年癸亥國府以翁本善醫且能創製砂糖爲藥坊主給月俸後竟至十五口於是封內製砂糖者甚多皆以之得利蓋亦園中富饒之一助也翁諱政章稱周慶讚大內湊邑人也文政貳季己卯九月二十六日病歿年七十四翁已歿後其鄉人思砂糖利潤及人不少乃爲建其祠祭之今又將爲建碑乃來乞余文夫小善必錄微功不遺今翁之功大也固宜記思吾與翁常相識義不可辭於是爲叙其事遂係之以銘銘曰

蔗是音種挺挺叢生。

似竹非竹有汁甘清。

製爲砂糖其利元享。

讚人索術其術難成。

卓然向翁得法發明。

乃能製出妙究其精。

其術遂弘助國富榮。

今建此碑勒翁功名。

弘化三歲丙午仲夏

藩儒

高尾

養撰

(右碑の側面の左に記あり)

里正向山政常乃翁同姓也鴻功如此而或後世隱晦之恐建請藩府而及焉此舉也。大里正木邨重照渡瀬

正直亦助之遂課於郡中之榮農夫而資焉蓋皆因此功者耳時 嘉永三年庚戌秋九月下院

明治三年向良明神を改て、祖靈社と云ひ、里人は皆砂糖神と稱し、同十三年綿糖共進會を大阪に開設せられた時、周慶製糖改良の功勞を追賞して金壹百圓を下賜された(内町向山 好哉受け)。同十九年香川郡東濱村松島(今市内松島町中程)に祠を立て向山神社と稱しました。

周慶死後の糖業

周慶の死後に於ても、同人生前の製糖に關する深い研究と藩の製糖獎勵によりまして藩中競ふて甘蔗を栽培し製糖の產出は年を逐ふて多きを加ふるに至りました。併し當時未だ製糖者に對する適當の保護特典を與ふることが無かつたから甘蔗の刈取から、砂糖に製して大阪へ積出し之を賣捌くまでには、多額の費用を要する爲に、該資金融通の困難に窮する者が多く、且つ時に天災に遭遇し、或は商人の奸策に苦めらるゝことがありましたので、往々不測の失敗を招いて反て窮境に陥るものが少なくなつたと云ふ事である。其當時流行した子守唄は能く其實狀を穿ち得て居ると思ひます。

砂糖作るなら薦コモから作れ

末は薦コモ着て門カドに立つ

(天保の初頃流行したり)

第六節 糖業保護勸奨法

切角盛大に赴いた製糖業が前申す如く悲況に陥たものですから、藩廳は大に之を憂へ糖業保護のことを奉行所、勘定場、吟味方、札會所等に任し之を救はうとしたが、まだ其方法宜しきを得なかつた所があつたものが容易に元の盛況には歸りませんでした。

(奉行所) 執政が其事務を取扱ふ役所

(勘定場) 一藩の財務を管理する役所

(吟味方) 薩政の樞機を執り行ひ諸官衙の事務を吟味する役所で奉行に屬するもの

(札會所) 藩札發行所で今の紙幣をつくる役所

併しながら當時農產物中砂糖に優るものはないのであるし、加ふるに天保六年(二四九五年家齊九代松平頼恕)時の執政世帯役で特に財務に長して居た^{ハヤミ}寛速水と云ふ人がありまして、頼恕藩主の命を奉し、糖業のことは農務に屬するからとて之を郡奉行杉野九郎右衛門に保護勸奨のことを擧げて囑托しました。九郎右衛門は又之を代官の竹内與四郎に委し、與四郎は又更に農夫宮内辰五郎に諮りまして、紙幣を増發し糖業資本金を貸付する等のことに付協議をしました。時に群議百出、或は消極的勤儉主義を唱へるものもあつたけれども、積極的殖産保護主義を唱へるものもあり、或は右兩者の折衷主義を唱へるものもあつたけれども執政は竹内與四郎と謀り、斷然積極的糖業保護論者宮内辰五郎(郡代組と云つて郡奉行の支配下にある二十人中の一人)の左記建議を採りました。

元來農民は一般に無智で事理が分らないため、只目前の小利を貪り、遠大の思慮がないと云ふことが現今の實情であるから、糖業は辛抱強く勉めて行けば莫大の利益を得られることを解せず、暫くして何か一寸の故障に遭ふと直ちに之を廢してしまふ。殊に舊に慣れ新に向はないと云ふことは、之亦農民の常であるから、理窟を説て之を誘導した所で容易に其頭を改めさせにくい、是が保護勸奨を密接にしても其効果の擧がらない所以である。——故に今之を隆盛ならしめるには、宜しく便宜の方法を立てるべきである。

即ち産糖地方に於て名望ある里正(庄屋役)及農民中の有志を選んで、絶えず誘導の責任を持たせ、肥料の資金を貸付け、爲替の便を與へ、納租の融通を滑にし、或は其業に勵精なるものがあつたらば、必ずそれを賞し、又之を妨害するものがあれば必ずこれを罰し、又保護の爲にする諸般の貸與金は地方資産家の人を選び、確實の方法を立て之に任せると、其者は自ら之に注意するのみならず又自分がつてゐる多數の小作人にも其業に従事させるやうになり、藩廳は勸奨の爲に官吏を派遣する必要もないから、大に官民の費用を省くことが出来るであらう。

直ちに拔擢して「砂糖方取調引ノキ」とし、次で「砂糖方」を置き元締役に登用されました。この後、辰五郎は三十六年の久しい間踰勉一日の如くにして遂に大成功を遂げ、明治三年に至り隠退をしました。當時藩廳は之を優待し、特典を以て終身二人扶持を賜ひ且つ嗣子にも家督を相續することを許した。

ました。斯く別途に終身祿を賜ふと云ふことは本藩絶無の特典であつたと申します。

第七節 糖業保護政策實施當初の困難

之より先藩が辰五郎の建築を納め、天保六年に藩札を發行したが、當時藩の財政は頗る困難を極めたから、人民は皆疑懼の念を抱き藩札を正金に引換へて呉れど札會所に出願するものが多く、爲に札會所は殆んど閉塞せんとする時にあたり、權道を以て正金を支出し故らに砂糖を買上げました。そこで人民は藩廳に正金の準備貯蓄あることを信じ、藩札引換を猶豫したと云ひます。

又此頃突然幕府巡檢使より本藩紙幣六貫目(九十三兩強)を、正貨に交換しやうと云ふことを照會して來ました所が、之に應すべき正貨がないから、執政は辰五郎に謀り、遂に少許の正貨と紙幣とを出して砂糖を買上げ、之を販賣して交換の資に供したけれど、即日交換の出來なかつたと云ふかごにより、巡檢使は公然當時郡奉行であつた田原三平に向つて其狀を幕府に具申しやうと照會して來たことがあると云ひます(今其眞書が存して居るのである)。これでも其困難狀況が想像できます。

而して六年發行の紙幣は僅々四萬兩(其實は貸出しに應じたものであるから大分超過してゐなければ表面の發行額を四萬兩と定めたのは發行の超過しない狀を公にして信用を收めたものであります)であつたけれど、漸次該業に向ひ、爾後年々貸下げ金が増加するにつれて紙幣を増發し、遂に七十萬乃至八十萬兩の多額に達しました。其間紙幣を出して正金を回收するのだから、同一の紙幣は數十回

正金に變じて國庫に復すると云ふ事實だから、實に當局者と雖も豫想外の盛況を呈したのに驚いたと云ひます。

【大阪砂糖會所を設けやうとした時の苦心談】

前に申した製糖業者が一時大なる悲境に陥つた原因の一つは、今の阪神即ち當時兵庫大阪地方仲買人は製糖業者の積み出した砂糖代を成るべく安く買ひこなして、己れのみ暴利を得やうとの奸策を施した結果でありますから、藩がこゝで眞面目なる製糖業者たる農民を保護する爲には、一種の倉庫制度をつくり、次節で述べるやうに兵庫大阪に積み出した産糖を、最も高價に賣れる時まで藩庫に預け置くことにして、其賣るべき時機を旨く見定めるべき顧問商人を選任して置く必要があり、木津川の黒川屋喜兵衛を選定しましたが、此黒川屋は當時の大阪商人中では最も信用の高い人格ある豪商であります、高松藩位の小藩の御抱へ顧問を頼んだ所で、容易に承諾させることは困難でありました。此時其黒川屋を我手に入れる爲には種々の工夫をめぐらした。其談片が傳つて居ります。

初め大阪に會所を設けやうとする時、竹内與四郎は最も其計畫に力を盡したもので、先づ時の勘定奉行で大阪藏屋敷留守居役たる藤川三太夫(文藏氏の父)をやつて、木津川の黒川屋を説いて會所の相談役を托しましたが、其交渉が容易に進捗しなかつたから、與四郎は更に又町人後藤勘四郎(後藤漆谷の子、頗る茶事に委し)を大阪に派遣し宗匠、木津宗詮(千家の後見)と茶事を以て交りを深くさせました。之は深い計畫から出た事

でありました。即ち黒川屋は頗る茶事を好み、木津宗匠に師事して居たものだから、高松の方からも茶人後藤勘四郎を出して茶事で往來親交を厚くし、終に木津宗詮の斡旋のもとに黒川屋を應諾させるやうになり、爾後藩の木津川倉庫に山積する砂糖樽は、毎年黒川屋の指圖に任せ、最も有利の時期に賣出しを行ひ、非常なる利益を得て之を製出者に分配したものですから、藩下の農民は大に喜び、何れも樂んで甘蔗を作り精選した砂糖をつくることに努力するやうになり、愈々讃岐糖の名聲を天下に響かせ、製糖業の面目を一新したのであります。これより糖業保護政策の本領を述べることに致します。(未完)

國際商業會議所

久我眞三郎

此の設備は一九二〇年の創立にかゝり日本には未だ一般に知られて居ない様ですけれども、日本も既に加入して居り、獨逸も國際聯盟に入る以前に之に加入して居り、米國の如きは、國際聯盟に入らずして寧ろ國際商業會議所に入り、非常に力を入れて居ります。之に加入せる國にして已に國內委員を設けたるもの二十二ヶ國、會員數一八五三(一九二六年九月現在)巴里に常設本部があり、各國委員が居り、又時々各國の代表を招集して、大小の會議を開き、國際聯盟とも連絡を取つて行動し、其の目的とする所は各國氏の協調に依り貿易を發達せしめ、各國民の福利と國際平和を追及するにあり、商用語商業樣式の統一の簡捷を計り、無用の障害を撤廢し、仲裁裁判及和解の制を設けて居ります。將來は益重大なものとなるでせう。……………(如水會々報第四十一號より)